

卒業論文
多重役割の狭間で揺らぐ保育士たち
——専門性を揺るがすジレンマの構造——

2017年度入学
九州大学文学部 人文学科 人間科学コース
社会学・地域福祉社会学専門分野

2021年1月提出

要約

本研究では、保育の多様化が進んだいま保育現場で働く保育士たちがどのような役割を強いられているのか、そしてどのような苦悩やジレンマを抱えているのかという実態を描き出し、そこから見えてくる保育現場の問題や今後の可能性を明らかにすることを目指した。保育者のなかでも本研究において保育士に焦点をあてた理由については、筆者の母親が保育士として働いており、保育士の声が十分に拾い上げられておらず、保育園の実態や保育士の困難が明らかにされていないと感じたことが本研究に取り組むきっかけとなった。

第2章では、子育て・保育に関する先行研究をまとめた。第1に、日本における子育ての社会化を把握するために、少子化の流れとこれまで行われてきた子育て支援政策について整理した。1990年の「1.57ショック」以降、「少子化対策」「女性の社会進出」を目的として急速な保育サービスの拡充が進められてきた。しかし、保育の民営化・市場化による質の低下が懸念されるようになり、今日では保育の質と量の両立が求められているという現状をまとめた。

第2に、「現代の子育て事情」について概観した。松田茂樹の「育児ネットワーク」研究をとりあげ、子育ての社会化が進んだ今日においても家庭内の育児を担っているのは主に母親であり、育児ネットワークを築くことができずに孤立感を抱える母親が増えていることを論じた。また、そのような孤立感や不安が母親たちを子どもの早期教育に向かわせると指摘する濱名陽子の先行研究をとりあげ、早期教育が一般化されつつある要因を整理した。

第3に、子育てにおいて親の選択や責任が強調される社会のなかで、母親たちが抱える苦悩や葛藤に焦点をあてた。仁科薫の先行研究をもとに、「保活」が母親たちに負担をもたらしている背景を「雇用倫理」と「ケアの倫理」に基づいて整理した。また、牧野カツコの「育児不安」研究や江藤由美子によって指摘されている現代の母親のダブル・バインドについて論じた。

第4に、現在の保育現場の課題を整理した。保育園（施設型保育事業）に関しては、慢性的な人材不足が最も大きな課題であり、早期離職が繰り返されている状況では保育の質の向上が期待できないことも懸念されている。松木洋人の先行研究から、保育ママ制度（家庭的保育事業）においては、支援者が家庭性と専門性の間で揺らぎを抱えており、ひろば型支援制度（地域子育て支援拠点事業）においては、支援者が当事者性と専門性の間で揺らぎを抱えていることが示された。

最後に、保育士の専門性をめぐる議論や、保育士のキャリアに影響を及ぼす要因、保育職務に関するストレスや葛藤について焦点を当て、保育士に関する先行研究において明らかにされている点を整理した。松木の「保育の社会化とジレンマ」の研究をとりあげ、保育の長時間化によって保育士は自らのケア提供に疑問を持ち、ジレンマを抱きやすくやっ

ていることをまとめた。また、小堀哲郎の保育園におけるクレーム増加についての考察をもとに、本来保育は消費される「商品」ではないが、現代の消費社会においては保育園・保育士も保護者から選ばれる立場になってきているという流れを整理した。さらに、保育者養成校では保育士の専門性が重視されているが、現場では専門性よりも先にマナーや人間性が重視され、そこにずれが生じているという中田奈月の指摘を示した。最後に青野篤子と金子省子によって行われた保育士のジェンダー観に関する先行研究によって、保育士は子どもの個性を尊重したいという意識を持っているものの、集団統制のために男女という性別カテゴリーが用いられていることが示された。

第3章では、インタビュー調査を行った保育士4名の語りを整理した。今回の調査では、大規模保育園に勤める保育士3名と、これまで先行研究で取り上げられることの少なかった小規模保育園に勤める保育士1名に話を聞くことができた。本研究の目的は、これまで十分に拾い上げられてこなかった保育士の語りに焦点をあて、そこから見えてくる保育現場の問題を明らかにすることであるため、半構造化インタビューを実施した。

第4章では、インタビュー調査によって得られた保育士の語りを、労働環境、専門性、保護者との齟齬という3つの観点から、先行研究と照らし合わせながら分析を行った。

第5章では、結論として本研究によって得られた新たな知見を整理した。第1に、保育士は多重役割の狭間で、「自分の保育とは何なのか」「何が子どもにとって良い保育なのか」という問いを抱えていることが判明した。その揺らぎを共有し、保育士間・保護者間で話し合うことのできる環境の必要性を示した。

第2に保育の在り方を硬直させている縦社会の構造を明らかにした。子どもへの対応は保育士の裁量に任せられており、保育士間にずれが生じていること、そして年功序列の文化が影響し、保育士の専門性の向上や評価を阻害している実態があった。

第3に、保護者との齟齬が保育士のジレンマを形成する要因となっており、保護者との関係性が保育士のジレンマを解消する手がかりとなり得ることを示した。

最後に本研究の限界として、今回のインタビュー対象者はやや経験年数が短い集団であったため、現状の一端を明らかにするにとどまった。また、保育士のジレンマを解消する手がかりとして、保護者との関係性や保育士間の連帯を提示したが、大規模保育園においてそれらを可能にする具体的なアプローチを言及することができなかった。今後の課題としては、保育のICT化による業務改善が保育士のジレンマを解消する可能性があるとの仮説を述べ、本論文の結びとする。

目次

1	本研究の目的.....	1
2	先行研究.....	2
2.1	子育ての社会化.....	2
2.1.1	少子化の背景要因.....	2
2.1.2	子育て支援政策.....	3
2.1.3	「子育ての社会化」の現状.....	5
2.2	現代の子育て事情.....	5
2.2.1	育児の担い手.....	5
2.2.2	育児ネットワーク.....	6
2.2.3	早期教育.....	7
2.3	母親たちの苦悩.....	8
2.4	保育現場が抱える課題と現状.....	11
2.4.1	保育園が抱える課題.....	11
2.4.2	保育ママが抱える揺らぎ.....	12
2.4.3	ひろば型支援に期待されること.....	12
2.5	保育士という職業.....	13
2.5.1	保育士の専門性と女性性.....	13
2.5.2	保育士のライフコース.....	14
2.5.3	保育職務のストレスと葛藤.....	15
3	保育士の語り.....	18
3.1	調査概要.....	18
3.2	A氏.....	18
3.3	B氏.....	21
3.4	C氏.....	23
3.5	D氏.....	26

4	考察	29
4.1	保育現場の職場環境	29
4.1.1	縦社会の文化	29
4.1.2	労働に見合わない給与	30
4.1.3	大規模保育と小規模保育の比較	32
4.2	保育士の専門性をめぐって	33
4.2.1	専門性をめぐる揺らぎ	33
4.2.2	分裂するジェンダー意識	34
4.2.3	多重役割を突きつけられる保育士たち	35
4.3	保護者との齟齬	36
4.3.1	ケア役割を期待しあう保育士と母親	36
4.3.2	子どもと保護者の間で板挟みになる保育士たち	37
5	結論	40
5.1	多重役割を強いられる保育士たちの揺らぎ	40
5.2	保育を硬直化させる縦社会の構造	41
5.3	保護者との齟齬がもたらすジレンマ	41
5.4	本研究の限界と今後の課題	42
	参考文献	43
	謝辞	45